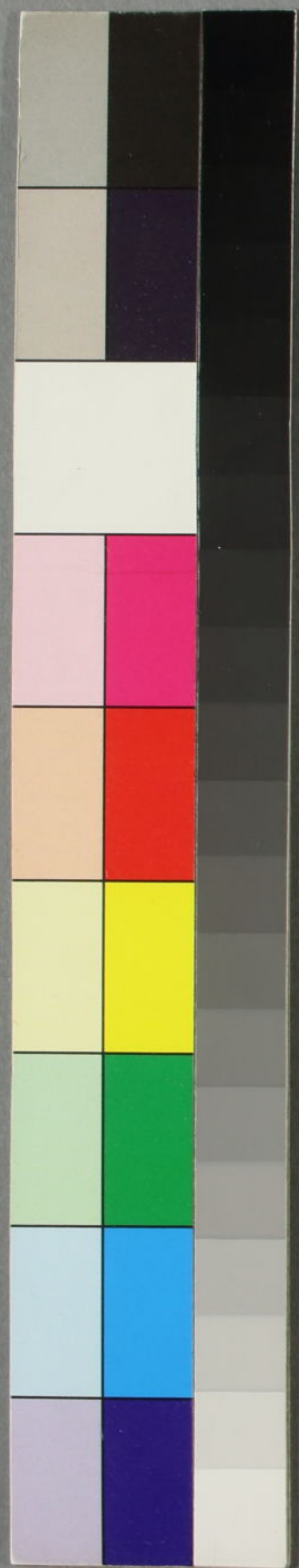


觀音守護寶劍五

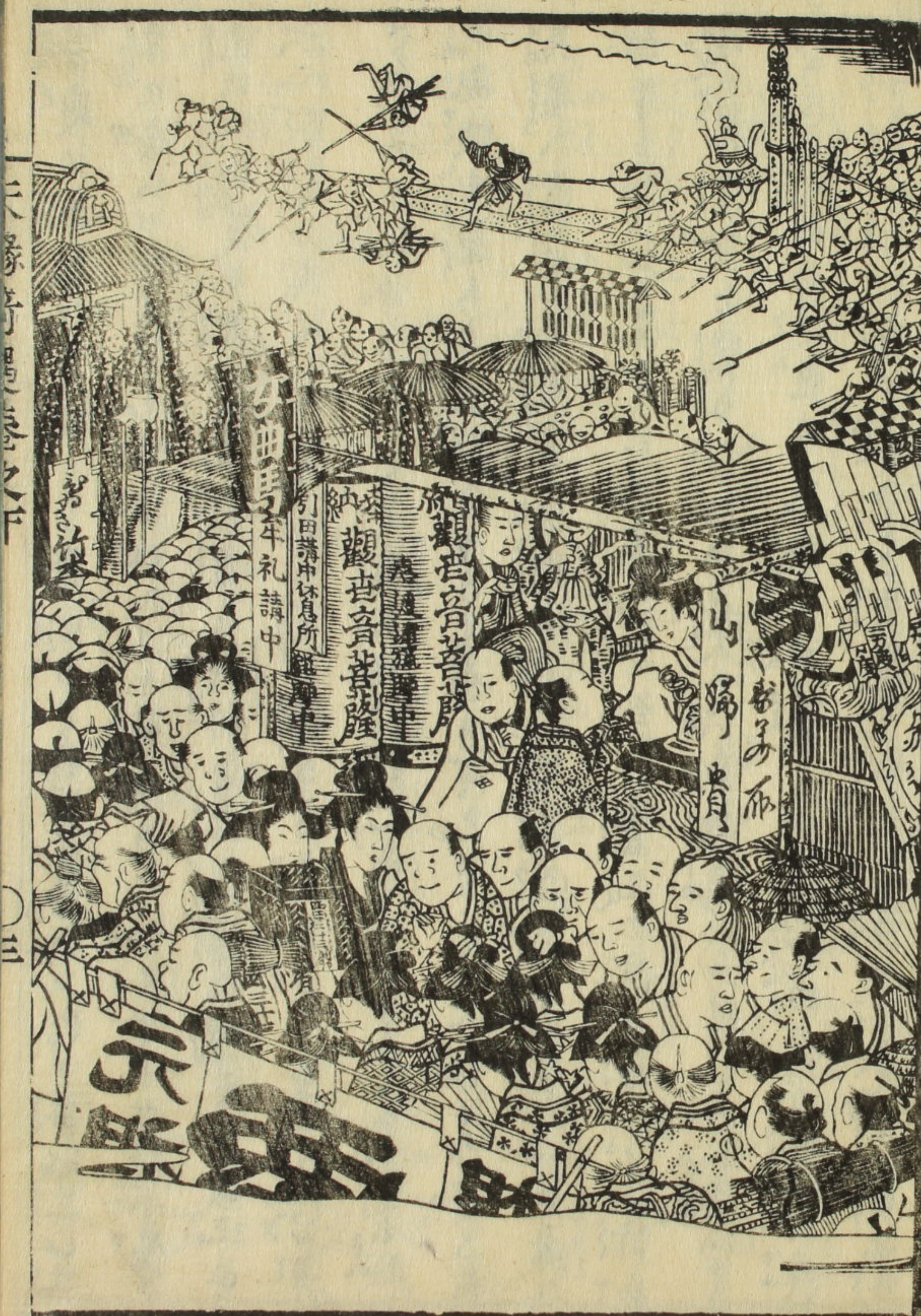
へ13  
3707  
5



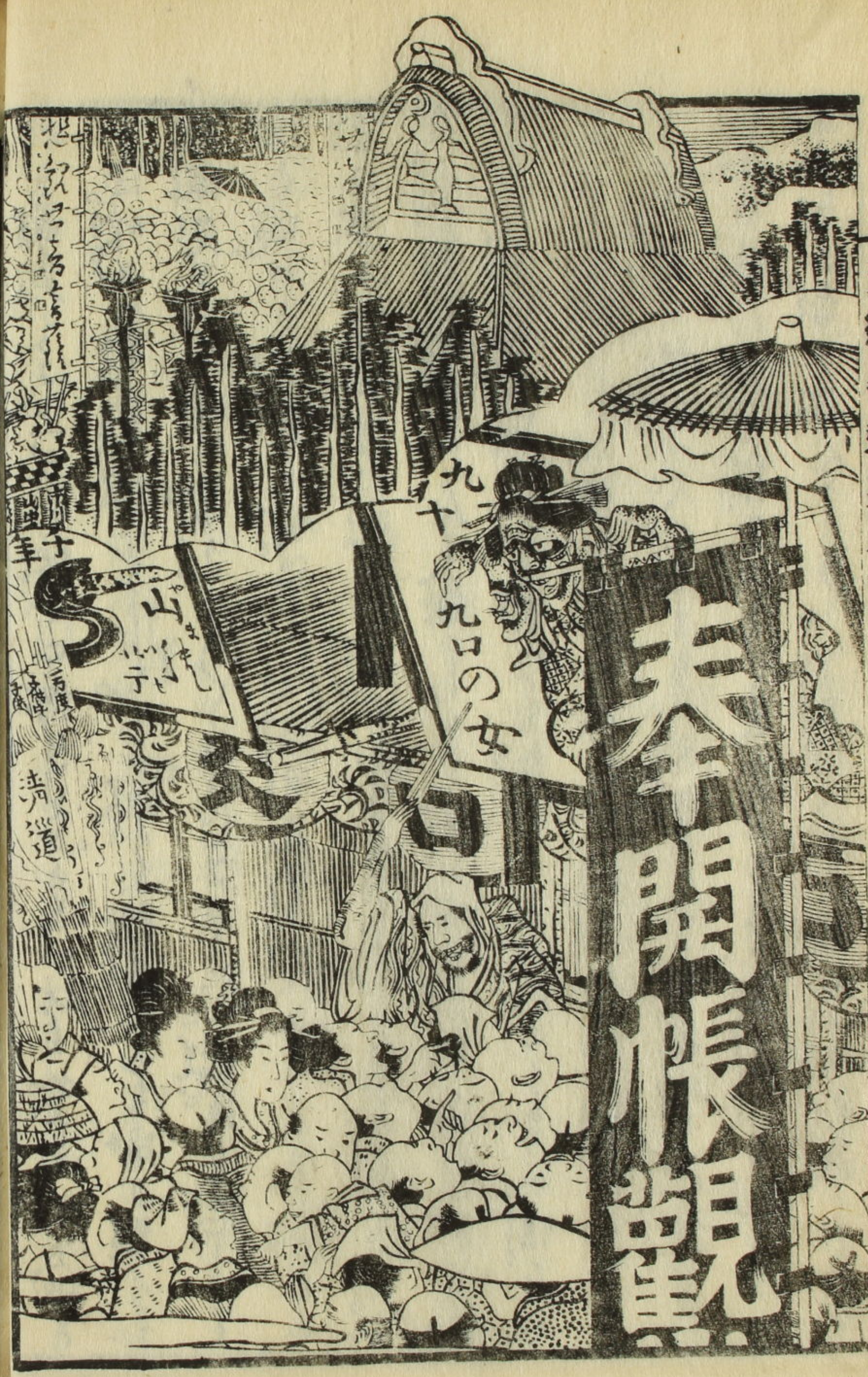


軒ありそが中に彼の軍者六の野藏と謀りて俄に仮家は造り設け  
 軍大さきる看板に九十九の口あり女はあくまど恐ろしき姿に写し  
 先是と外の方に高くとくげ出せりその古今に奇しと奇しと  
 見ざるもの或は頭の雙り見蛇遣の女人更雷敷の類其外あげ  
 算うるに違はりよほど九十九口の女と云ふハ誰も見ても未嘗有の  
 妖怪なるが往來のもし人所せざるは仮家にとどひ来りり交是は  
 窺ひ見し其隣まゝの野藏が造り成る仮家に居て是の昔昔の半  
 鯉魚にありとる所と画がきり看板とてげり又奇しきまが誰くも  
 見ざるしとく小屋の口に押合ぬ物は昔昔の紀の国ある山熊が  
 所にもく米ぬるは野藏忽ち魚の金を出し求め置かむはまがく  
 柳は得てしとく人くに見ざるにみんやがく大さきる龍に入ま  
 り置声るる上げく然るの謂きとるりやいさ葦と明て裡と

るに昨日の半昔積るるもくやんく鯉魚とて成り果るも  
 野藏見しとく大に驚きこりくいりにこりたと前後と忘りて  
 泣く日や鯉魚に慥にすけ汝半身昔昔積るるもく多くの  
 金に替るる如何に心あると鱗の身なるもくさるの事と弁へ  
 忍尋常の鯉魚とるる愚さるる姿と成り果るつねの用なるも  
 今ハ唯ハ裂きし一食も飽くし難面のうらまや情を乃  
 悲しと悲しと怒り彼の集ふる諸人もどろと笑ひりり  
 斯く野藏の人心地もく塩とて軍者六が許にりり  
 小屋の傍に声と密りりりりりりり軍者六も夫とす  
 りりの毒と諷くとき唯呆に居りり又野藏の云ひ



天竺



天竺奇遇卷之下

夫年開帳観

九口の女

清道

今度の用帳にを始り斯間がゆきまゝいゝぬ事共  
 幸に合ひざるべし唯仕馴ゆる夜働きに如くも  
 直に打壊くと思ふも魁首も阿妍と右通場  
 云ハ戦後六頭はうちつゝ其の實に筋多き  
 其處へ當寺の方より使僧と立く戦後六夫婦  
 越せしやもしさかんに汝手遣て承り當山  
 現款の聖夢と蒙る仔細あり夫は親珠島  
 入りたる卵巻の海居と云は現款菩薩とつ  
 九十九口の者に會てと云ふ今茲に汝が妻  
 即院主より召寄らる處あり勿論世界のうち  
 九十九口の者と云ふ一人ともあるべし  
 手に授けりものありし御前へ参りてと云  
 軍後六の不審も七金と云ふにほとく取  
 ほとく妻ある野風にくくと出頓而持て参  
 中居る野風も思ひに思つて唯さんとの向  
 べき時節ありと云ふうちに義とつて御軍  
 やとつて起し小屋の中よりいづれも立出  
 惣身爛れ腐き余多の口ぐり尽く歯と云  
 面々のづゝ癩病の如に見ゆれば往來の人  
 隠るるものありと云ふ奇しきものあり

九十九口の者と云ふ一人ともあるべし  
 手に授けりものありし御前へ参りてと云  
 軍後六の不審も七金と云ふにほとく取  
 ほとく妻ある野風にくくと出頓而持て参  
 中居る野風も思ひに思つて唯さんとの向  
 べき時節ありと云ふうちに義とつて御軍  
 やとつて起し小屋の中よりいづれも立出  
 惣身爛れ腐き余多の口ぐり尽く歯と云  
 面々のづゝ癩病の如に見ゆれば往來の人  
 隠るるものありと云ふ奇しきものあり

かくひに例の人々前後に纏りあるひと老らば倒し若きも実  
 逃げ返上り立上り受と思くと競あふいとく乱がりさ追喧し  
 かりたり口も亦度申の刻に程近くなやがみ采吉も謂来の折も  
 氏人立せし何更やんと窺く歩み行方思ひも彼の方丈の  
 玄關前にぞ近づき向う見れば金屏風は立度く中央に院主  
 と置けりその傍右左りに并居り物敷板の前に行きて平伏す  
 夫婦のもの則母の敵なれど神ありぬ身露ぞり夫と知りぬど  
 唯は更に見居りたりも右に院主の彼所に金の入る桐巻の落  
 居るに現世音の拾ひ置たるが九十九口の者にほり興べりし  
 露の音有る如末の多ひて人の桐巻と取出しとに比九十  
 九口の女にぞ与つる采吉のこれに立居り其桐巻は克く見えた

きかふくしに落せし覺のともなれ今更し其の語を大に不審  
 しく進も通々ぬ金あると君父の爲に借はくやと身代あらん看  
 異人にしれんも口惜しと勿大勢とこらく入り軍後六が傍に平伏す  
 彼の金と取落せし主ありし云ひ出せり院主と始め皆一同に驚き  
 々中に都講めける法師出で采吉を云ひたるのいりは汝金に落せ  
 主なりとも靈夢にしろ九十九口の者にあはる處々の曲を汝に与へ  
 ごとくも汝と落せしに究まらば如何ある金といふぞり  
 入らば疾く申せと責りたる采吉は返答に言葉あり  
 まつとまらにらぬ時ぬ軍後六の采吉は白眼見て大に怒り汝々  
 勘太がもとにちりほりし小僧見あはばやいりあぬが處に来り我が幸  
 と妨ぐんと斯大衛と云ひ出せり頃夜あり往還と却りて財宝は

奪ちとすしも定てはらぐ業なきごとく盗賊は懲りめん  
 如くとも奉は上る丁とうらふも米吉も無念の決やあて  
 唯中に思や正し賊の奪ゆる金銀を我に密に奪りとせし  
 然に観音の得しものありとさうつひも観念なきが  
 血人とすし例の鯨藏くさう飛くりも無二無三に打擲さ  
 かの境内の商人ども先より茲に見物ぢり人々のうらも手こ  
 拳とやうと盗人と打殺せしき殺ちとひめはついでいやうんに  
 下り重あつて情も米吉は手どり足どり可責く其時院主り  
 端近く下り立ちいかに人々静まづし壁へ街盗人にもあせりくの  
 かく我が目に掛るは是と助け道いささあひありつて其小童と我に  
 俾さすしとく出家に為まづと尊き声しとさあへ下り重りける

入しヤがて左右へさうのにりる時に野風は九十九の口一度に笑  
 るの我まうりの米吉や近く寄りしを顔見んと飛らざりり  
 うのいば米吉とさうしものく米吉も殆奇異の思ひとなり更  
 不審時ぞりし我が名はさう米吉とすゆも縁は人とも思へざ  
 うる異形の女を尋ぬ母の侍もさ思ひ奇りぞりける  
 軍者六もは不審りりりる護法と云ふやと野風が面を打守りて  
 暫時傍に扣る處に野風はか心声を上げいかに米吉慥にゆけ  
 是なる夫の敵鬼塚道見に住へる横島軍者六と云者あり米吉の  
 いらし道見に与がし主君の御家と攻せし刺へ我が夫をも決て  
 島の南海に沈めしを斯くとすのさすり一大直は泄や  
 軍者六ありとめき先其口と抑めき又他の口よりらり

大木とひろげく物身の口ぐは度いぞも井の池とあその口の口は  
 高らるにうらり出ねがさへあらうと胡乱くもさうく十方  
 暮々坐しうらうらふ九十九の口ぐに落りて云くくやも過  
 一年の春の頃我が夫小船に掉きて冷洛島の南海に漕出で  
 むらぐ其口のつり帰りの程の逢らぬ時留守の隙と待よぬ姫君  
 諸共御身と持て浦辺づつとさあよしと思ひ掛けぬ夫の死散に  
 廻りほ悲しき夏の人まきに又悪鳥の飛下りて彼の姫君と擱  
 つて雲井とさうと翔行つたけりの夏にち乱き其御身とさうに  
 捨置唯悪鳥の跡は追やうとさうさうさうさうさうさうさうさう  
 管船の中にうらて斬く人の地つききき其船中に則は軍後六  
 我と捕へく非義非道と構へぬ悪く悪くといはるうに有はる刀は

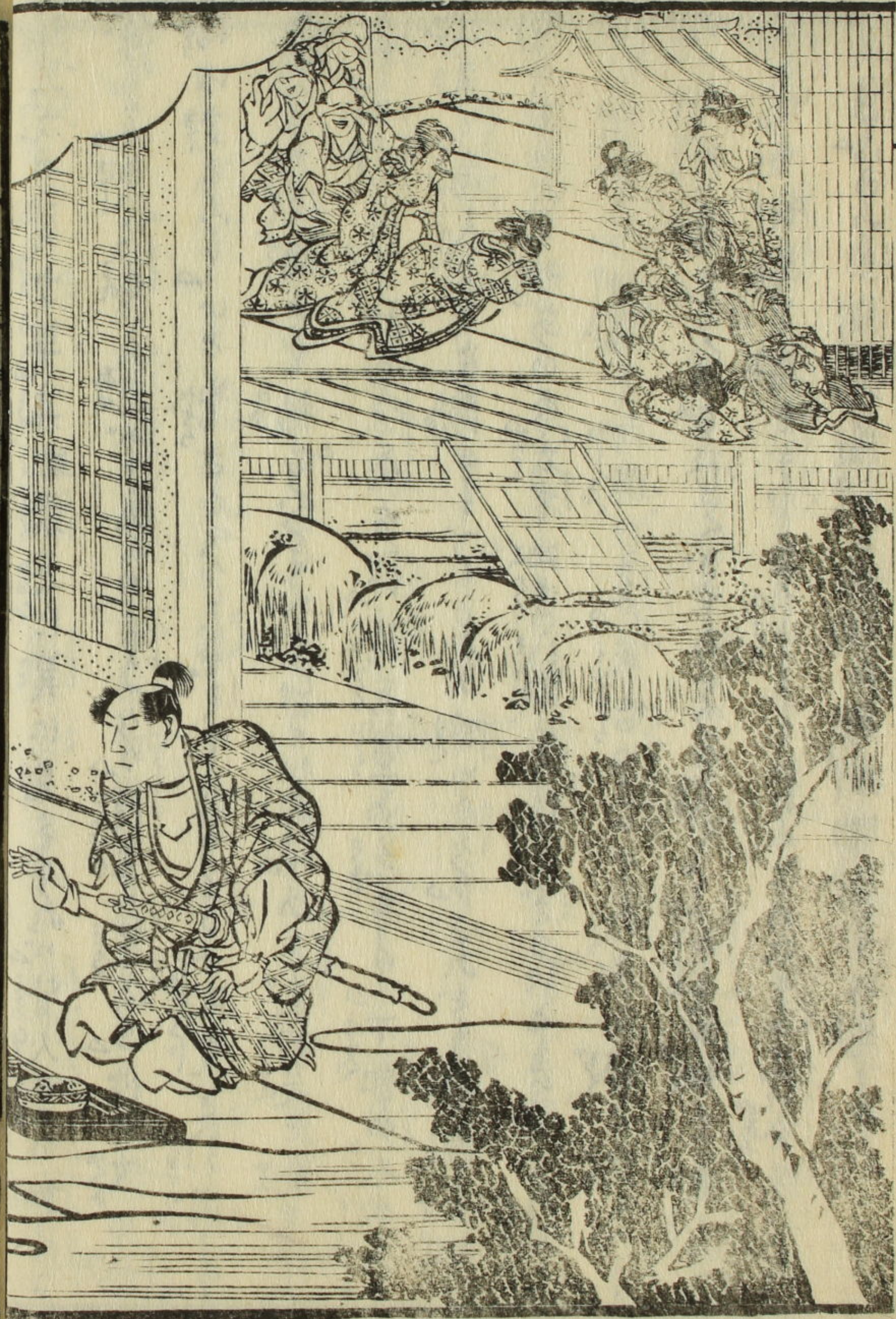
抜て切んとせしにさげり女のか及びぞ怒刀を打落その其上  
 十分の怒にけうて已に我と殺さんと云くつて刃向う  
 ていざいざ唯一刀に討果さんる面刀にー殺とてあとい  
 二寸三寸が惣身に疵つけか己に九十九刀にー息とて其時  
 我が夫女のどくに見きぬひて御寂後の始末をまつてに括り  
 あひさきさねが敵の鬼塚道見もこは軍後六も正に覺て  
 其勢憤は晴すぬめ斯軍後六も妻の身につさうわく飽くま  
 憂目と見せんるるや九十九ヶ所の口と見ぬ真其如く疵つて  
 修羅道に赴きける我が怨霊の為ま業かり元来七この軍後六  
 夫婦の若く山賊海賊と作業とて多くなの人以害せりか頓て  
 天網にうらんと必定せりさうの先に御身采まらぬ怨敵は

天網にうらんと必定せりさうの先に御身采まらぬ怨敵は

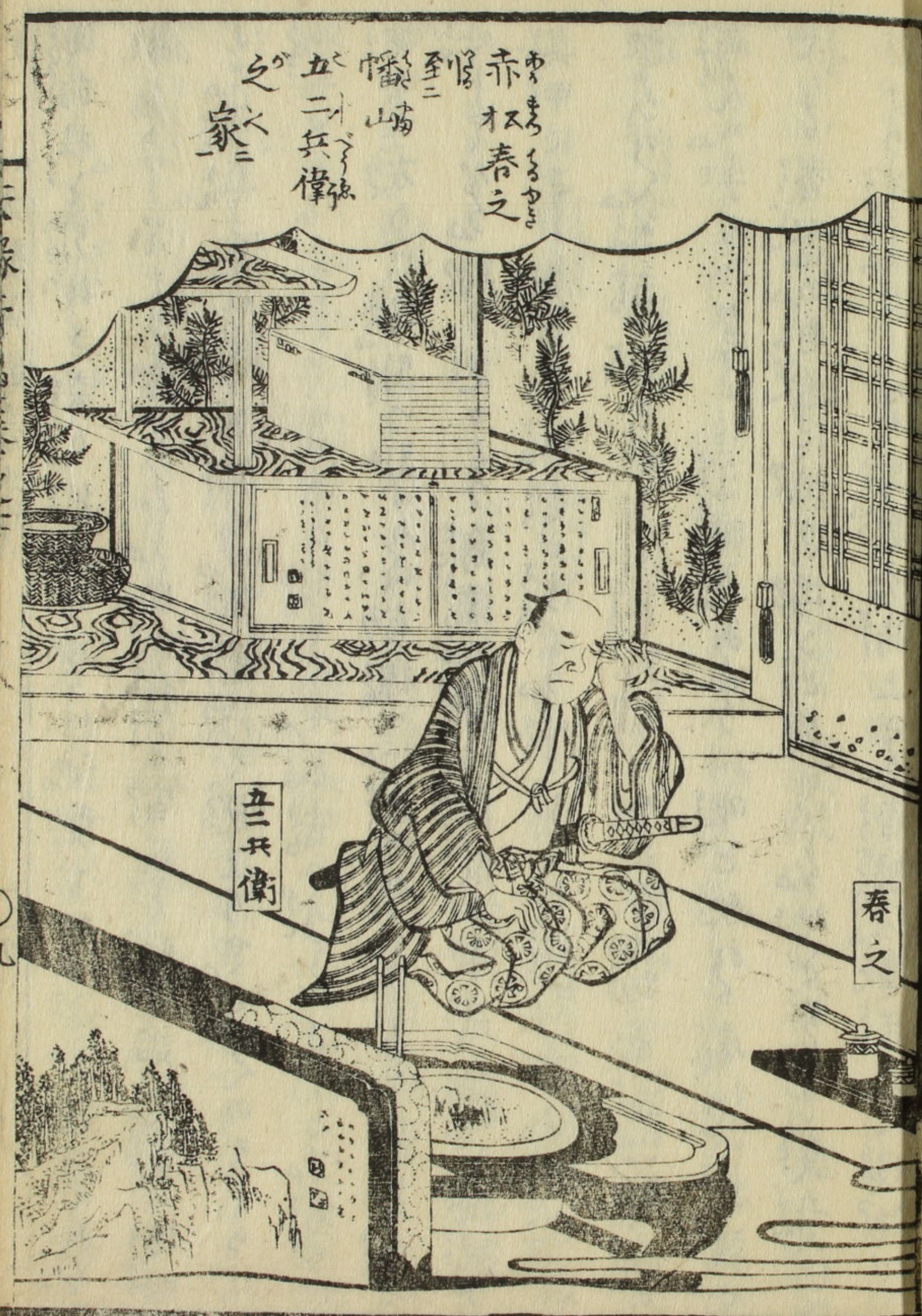


討果し疾く我くが鬱憤以晴くす。只は更は告くを年次  
 脚身と待新し。再安婆になくへ。いざらふ。又璽王の豫弥国に  
 苦むかろ。名ごうわの我が子やと云わくと見れ。忽に野風ハ七轉ハ倒るそ  
 ろのびぬ。いさぎよく各乗人あはと覺悟と究め。何より狭とほろ。上  
 上り大音に怒り。いづくも女が申せ。どき覚へ。何れが  
 汝采吉とや。速み我の勝負と決ま。さうく必返。うち  
 討くは。恨くせ。やくくねとひつ。も大手さ。らぐ待ち  
 うく。い。保く。と采吉。から肌。脱ぎ拳。と。勇。進。く。で  
 詰。り。時。に。雙。方。土。民。の。姿。に。打。份。を。時。節。を。ね。願。に。一。乃  
 短。刃。と。持。り。然。る。に。敵。の。名。に。あ。れ。は。兇。賊。采。吉。の。體。に

拾五丈の美少年其剛柔大に異に見え。乃皆人雲の如く。ま  
 寄り。更に是と危。か。め。り。なり。院主。先。り。彼の。女。の。物  
 語。は。す。め。い。と。驚。き。あ。り。し。が。一。大。丈。と。引。出。し。  
 と。の。づ。つ。道。場。も。穢。ま。ぎ。や。わ。ら。さ。ぬ。が。ひと。先。づ。是。と。制。す。べ。し  
 と。た。た。に。下。知。と。つ。え。ぬ。べ。待。君。黨。と。先。と。下。部。の。人。殺。余。多  
 出。来。つ。兩。人。と。も。に。静。ま。る。べ。し。と。呼。り。ら。れ。も。横。島。赤。松。ハ  
 耳。に。も。う。か。打。あ。い。ぬ。右。マ。四。方。八。面。より。捧。ら。ぎ。の。い。と。も。さ。き。さ。ら。二。人。が  
 同。に。打。ひ。つ。押。隔。つ。押。隔。つ。ま。采。吉。り。ら。打。来。つ。捧。と。突。つ。し。  
 或。折。或。寒。ま。目。に。さ。き。あ。り。の。人。と。手。玉。の。如。く。左。右。へ  
 投。の。け。唯。横。島。と。迹。を。ま。ど。り。し。も。う。れ。に。め。は。ま。さ。合。つ。別。れ  
 る。わ。あ。く。纏。つ。横。合。の。例。の。難。藏。膝。に。身。は。為。し。一。丈。合。の。



春之



五二兵衛

赤松春之  
至幡山  
五二兵衛  
之家

日向柱と引抜き来り米吉は目かけつ骨も折まると投つくれど  
 身はうろたへての通りなぐ日向柱と宙に廻り廻り足元見の得物  
 と取直してほろりと押へる軍姿六も飛上りてくぐりのまゝに  
 両手とりげこころと引かき米吉は又もささりと右りに  
 捻まひ左りに捻引つ引かぬ有様仁王の力どめしと見る人膽は  
 冷しそぐら斯と見ゆり野藏は傍に散る手来の捧と拾取り  
 真甲にさしこめて米吉は後より噓うらと打てくば叶難くや  
 やまひく米吉は飛さるりて其体姿の失にけり物軍姿六野藏の  
 両人の手ちらぎに立踵りありに眼を配ぬ處に不思議や  
 大なる香盤の自然に揺ぎ出ると見えし地とちあき五尺はて  
 下より米吉ありり出斯く指上る香盤は軍姿六に投げられ  
 山のどくに盛るる灰の霧の如くに降りりて目も口も閉じ  
 乱れ入りぬ是故に軍姿六も野藏も寸前には分つこと能はず  
 どのづうとそれのうらみに見えしうらみと米吉は縁の  
 綱は引切て野藏が頭に打つ力まき引倒しと吐きつと米吉は  
 一もの野藏とありり或はかき或は苦し七轉八倒し  
 うんとむりに息絶えり軍姿六斯と見えし頭より怒を發し云  
 甲斐なき野藏が身の果や見え米吉速に汝が息の音留べきぞと  
 胸めり眼と押開き軍姿六に傍と覗め米吉は完と打突め  
 手の鳴る方へ来るぞと彼方の方と立廻き追つてくぐり  
 軍姿六が心のかけにやれども眼中に反と舍りて認ることの  
 なるるに齒噛と為しと坐し唯無念やと打喚め米吉は

日向柱と引抜き来り米吉は目かけつ骨も折まると投つくれど  
 身はうろたへての通りなぐ日向柱と宙に廻り廻り足元見の得物  
 と取直してほろりと押へる軍姿六も飛上りてくぐりのまゝに  
 両手とりげこころと引かき米吉は又もささりと右りに  
 捻まひ左りに捻引つ引かぬ有様仁王の力どめしと見る人膽は  
 冷しそぐら斯と見ゆり野藏は傍に散る手来の捧と拾取り  
 真甲にさしこめて米吉は後より噓うらと打てくば叶難くや  
 やまひく米吉は飛さるりて其体姿の失にけり物軍姿六野藏の  
 両人の手ちらぎに立踵りありに眼を配ぬ處に不思議や  
 大なる香盤の自然に揺ぎ出ると見えし地とちあき五尺はて  
 下より米吉ありり出斯く指上る香盤は軍姿六に投げられ  
 山のどくに盛るる灰の霧の如くに降りりて目も口も閉じ  
 乱れ入りぬ是故に軍姿六も野藏も寸前には分つこと能はず  
 どのづうとそれのうらみに見えしうらみと米吉は縁の  
 綱は引切て野藏が頭に打つ力まき引倒しと吐きつと米吉は  
 一もの野藏とありり或はかき或は苦し七轉八倒し  
 うんとむりに息絶えり軍姿六斯と見えし頭より怒を發し云  
 甲斐なき野藏が身の果や見え米吉速に汝が息の音留べきぞと  
 胸めり眼と押開き軍姿六に傍と覗め米吉は完と打突め  
 手の鳴る方へ来るぞと彼方の方と立廻き追つてくぐり  
 軍姿六が心のかけにやれども眼中に反と舍りて認ることの  
 なるるに齒噛と為しと坐し唯無念やと打喚め米吉は

天竺部選卷之六

又例の回向柱と引投耒り戦後六に向ひて云へく汝我が母は  
 九十九乃殺害り其返報に今又汝と九十九打て殺るを  
 ぞとやうもさうさう上つてと續け打に打居れあともさけび  
 あと喚びて人目も恥ぢのぞ打つて九つと九つと笑へ畢りて  
 くさくの柱と手りてくさくさくことさうさうぞ咲華が語とて心地  
 よやとりふるとやまへ軍後六の眼技出口より鮮血を走らうと衝く  
 地獄へ赴きうりうり九の院主と始奉りて并居る殺百の面く  
 参詣への上下とも米吉と譽る声さうさう天地と動くうり其時  
 院主の米吉と近く召れ是に告るのめやう汝若年うりといへとも  
 不思議に力量九なうさうは至孝あり親の仇と覺ると感る  
 又あまりあり併みうり固う公に訴へる復讐なうさうとて母を

同賊にも何れ私に害せし中くは其罪と蒙るもさうさうべ  
 けいしを君父の仇ある鬼塚道見とも尋ねて彼の姫の行衛  
 とも探るべうらば汝唯速に茲を去れ汝が母を討つる者共が  
 我懇み跡とて頃に仏果と得るぞ唯く汝速に去るべしと  
 尊き命を受くは九十九の院主を叩拜し有りやうさうさう  
 已に行べき身がさうさう甲斐なく上るを院主の斬と苗めめ  
 ひとり大に歎息しそのあり我偏に過る一條ほり昨夜觀談の  
 霧夢によりて九十九口の者は尋一度女に彼の金を手りて  
 風と是を考へて渠は九十九口の者にうり無うりさうさうそのめ  
 如何にとるんぞ咲華が怨霊に主せり口九十九なう固う面部  
 具しとる口の一と合せしこい百口のものともさうさう眞の九十九口の

者と云へり獨汝が夏はく何りしぞ現く疑ひ有るべしと  
 示し多るが米吉大に驚きあはれ物又軍後六が怨霊の我が  
 身に添ふあまの口の生やそやえざる魚と自懼きて面と  
 撫左右の手足と顧るも一点の疵なれはいさ多夏とのあたまを  
 心中に不審つし黙然とく扣つとらみ院主重く告めく  
 夫九十九の陽教也陽あれば必陰有りされば九十九に配るあり  
 八十八也八十八の則米の字なり凡陰教尽て陽教又起る是  
 天地自然の理にしく陰教ハ十に終る陽教ハ一より始る是の十と  
 一とばわく八十八に配るるとき九十九の教とらみ下り口と  
 加ふれ唯是米吉の文字なりと汝先に彼の朋卷と見て云へ  
 ろくくんの金と羨せし主ハ我たるもとされ観音菩薩の夢枕  
 主のあまの羅ロー主にくちちの御告ぐべし今又思ふに彼の百世の  
 女に是と与へしは女敵と討しめめん觀世音の方便か  
 覺ちたるも御はとらの告めはに金と与へしとく野風が  
 死骸のもりりる朋卷とく出し米吉に是と授はる米吉  
 ろし候と流し金の出所ともめざりて現音とて拜  
 院主仰ぎ謝しやがぞ茲と立去りける

第六 齋

此段播州室之津に名と残り名改竹庵花漆とて姉妹の  
 古墳にうつて其支跡と舉ことくども夏繁きともく茲に  
 省く願くは後編に述べ賢覽に備へし是より第七齋に

至るすゞの向こに又五年の星霜と重ぬと見らるる

第七 齋

初不吉、先のとりに觀せ音なり身の代の金を授りこれとせ  
 厭たがもみ暇とて其後播州空の津に徘徊し敵見塚道見か  
 行方と尋ぬとていづもいづもさるべき手ぐりもあらずり  
 結回を遍歴し余のりぎり尋ぬべしと心を変し一たび當  
 と立去くと後子住る室の邊に跡になしある山里に差掛りぬ  
 氏時已に采去い服し名は赤松春とて呼てたり年々や  
 二十に成りたりんば又力量も大にすなりいよく劍法の奥義と  
 其武勇父春時より選に越へ實に万夫不當の豪傑とて

物は山里はさうりつ行き行きとるが向め見れが一構の大住あり  
 内に五七人の下司男が白木造りの虎輿を荷ひ来り入るさぬなり  
 昏睡に患ふを念んで其形をゆなれが物に氏家に新表のほること  
 といはるる無常と感し何れも近く近づき其子細と尋ぬれば  
 彼の野暮り氏家より人身御供の出る日にくくるとふまを春之  
 竊不審にやいひいかなる者に捧にやとさめぬが山神に捧りありと  
 といひやきこのうちに入りぬ右々春之つくと思やう實に世の中  
 まいり得ざる夏こそ多々の神明のく人ととり喰や溜れや何れに  
 せんくる夏之始末と見ん話の種にもあつぬべし今宵この家に  
 宿とるる人身御供のおもひきを明めぬ折や一日も暮が成を幸に  
 つ入りて一夜の宿ともあつて云ひ入る主も情ほるものや

有りけん△疾く歩らるる一向△は通しぬ右△て春之△は家の様子△を窺か  
 り親族△尽く寄り集り△彼の御供△に備へ人のこゝれと惜△み  
 位△或ハ喚△時刻の来ぬ△と悲△むるも鬼角△しるゝとま△の  
 出来△とんが春△之も寅△丁寧に今宵△の恩を謝△し畢り頓△るの人身  
 御供△の備へを向△つ主△答へるも△は地△連山△皮の如△くに  
 一の△谷△子結△まきるる△其向△に往△古より山△神の住△めと△ひるゝり  
 然△こに近△来人身△御供を備△る夏△の始△りか△いさる△方の思△も  
 あ△の眉△目よき△女△は△つ△を△大△と△御△供△に△さ△る△夏△に△定△り△の△時△と△  
 其△家△の△軒△に△白△羽△の△矢△一△助△来△う△り△立△夏△あ△れ△が△正△に△是△を△神△詔△を  
 崇△の△奉△り△て△豊△の△初△夜△と△相△圖△に△の△山△中△に△も△り△行△く△な△り△我△と△入△の  
 嬢△と△も△る△が△夜△也△我△が△軒△に△く△る△の△矢△ひ△ら△ら△る△は△則△今△宵△の

